

【1999年大会テーマセッションの案内】

テーマ

「日本農村の20世紀システム—現代社会経済理論による農村研究の再発見」

コーディネーター 池上 甲一

コーディネーターの池上は、「研究通信」No.192(1998.9.25)においてすでに、1999年大会テーマセッションの問題意識と課題を述べている。今回の「研究通信」ではその要約と発表予定内容について報告する。

日本農業・農村の現代的「危機」は「20世紀システム」の下に形成・深化してきた。この危機は、何も農村の外部に起因するだけでなく、農民自身の主体的選択の結果でもあったところに問題の複雑さがある。このことは、「20世紀システム」の主要な要素をなす特殊日本の「生産力主義」を想起すればたやすく了解されるはずである。したがって、21世紀へのバースペクティブを開くためには「生産力主義」(同時に、「反生産力主義」に対する内省とともに、「20世紀システム」が日本農村においてどのように貫徹し、いかなる意味を持ったのか、また農民がそれをどのように読み替えつつ受容したのかを具体的に総括しておかねばならない。

今年度の大会テーマ・セッションでは以上のような課題を設定し、池上による「日本農村の20世紀システムをどう捉えるか」についての解題の後に、4人の若手研究者から挑戦的な報告をしていただく。

第1報告では、立川雅司会員が産業レベルおよび制度の視点から個別品目に焦点を合わせて、フードチェーンの変化と意義を報告する(「農業—フード・チェーンの変容」)。
第2報告では、岩崎正弥会員(予定)が安城市を例にとって、「デンマーク・モデル」以降の共同性をベースにする勤勉主義と「共」の縮小過程を報告する(「日本農村における近代化過程の意味と『共』の縮小」)。

第3報告では目線を農家・農民に落として、川手督也会員が落合恵美子の近代家族論に依拠しながら、農家家族の変容をライフ・ヒストリー分析と絡ませて報告する(「農家家族の変容に見る20世紀システム」)。

第4報告では、秋津元輝会員が山村の「発見」と定着、および岐阜県の山村における景観の変化から読み取れる生産力主義の浸透と帰結を報告する(「山村の20世紀システム」)。